

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

新しい美意識の登場：治琉歌の見出したもの

著者	仲程 昌徳
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	沖縄文化研究
巻	42
ページ	255-274
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/9958

新しい美意識の登場

—— 明治琉歌の見出したもの

仲程 昌徳

谷知子は「花と月の和歌」⁽¹⁾の項で「春といえば桜、秋といえば月というように、桜と月は日本を代表する自然の景物」あり、「和歌においてもそれは同じで、膨大な量の歌が詠まれて」いると述べていた。

「景物」というのは、「四季折々に賞翫ある物」をいい、「花郭公月雪を四個の景物といひ、紅葉を加へて五個の景物」といふと、一七五九年刊行された早川丈石編『俳諧名目抄』にあるそうだが、宮坂静生は、「季語はどのように生まれか―和歌の時代」⁽²⁾の項で、その箇所を引いて、「いずれも古来賞翫され、重視されてきた季語である。とりわけ花・月の二つの景物を賞美する思いは今日に至るまで日本の詩歌史を貫く動脈として忘れがたい」と述べていた。

「日本の詩歌史を貫く動脈」とされる「花・月の二つの景物」は、また、沖縄の伝統的な詩歌の世界についても言えることであり、それは、これまで刊行されてきた詩歌集に見られる通りである。

花も月も、確かに数多く詠まれてきたのだが、「月に関しては」として、宮坂は、「雪や花よりも古くから人間の生存と関わりが深かったと思われる」として、月が「地母信仰」と深い関わりのあることを上げ、「雪月花と称される景物の中でも月が格別のものとして注目される」由縁であると、論じていた。

また、久保田淳は、「天体のうちで月ほど多く和歌に歌われているものはない」といい、太陽や星の歌に較べ「月の歌が圧倒的に多い理由」として、月の満ち欠けが、「日の累積としての時間の尺度とされる」ようになったことから「人間は月に最大の関心」を払ったはずであり、「太古の昔から、人間にとっては、天文学的ではなく心理的に、月の方が太陽に比してずっと近い距離にあったと思う」と「月と人との親和関係」をあげていた。⁽³⁾

*

*

和歌で多く詠まれた月は、琉歌でも数多く詠まれているが、勿論、秋の月ばかりが歌われていたわけではない。

『古今琉歌集 上巻』春の部に

昔から月や秋とてやりいゆすが はるやはなの上にてるかきよらさ（尚育王 五）

という歌が収録されている。

歌は、花の上に照る春の月も美しい、というもので、それは、次のような歌を踏まえて歌われたものであるにちがいない。

秋の夜の御月雲晴て今日や四方に照渡る影の清さ（三〇三）

秋の夜の月の美しさを歌った一首で、『琉歌百控 独節流』十一段、立雲節の項にとりたてられたものである。そして、明治四二年には、次のような歌が作られていた。

庭に置く霜も玉のこと照らち秋よりも月のかけのきよらさ（比嘉賀徳 二二〇二）

これは、冬の月の美しさを讃えた一首だといっている。

宮坂によれば、年中見られる月が「秋を代表する景物と定まったのが『金葉和歌集』」で、「以後『千載和歌集』『新古今和歌集』でも、月は秋のものとして、秋の部にはいつている」というが、『古今琉歌集』の歌は、そのことを良く示すものであったと言えるだろう。

『古今琉歌集』の歌は、しかし、「月は秋のもの」であるということに同調していたわけではない。『琉歌百控』の歌は、「月は秋のもの」であるということをもつ当から受け止めて歌われたものであったが、『古今琉歌集』の歌は、それに抗するかたちで春を持ち出して歌われた歌で、明らかに『琉歌百控』所収中の歌を意識して歌われていたといえる。そして明治末期に新聞に掲載された歌も、「月は秋のもの」ではなく、冬のものであると、これまた『古今琉歌集』の歌とも異なる季節を持ち出していた。

冬の月に関しては「新古今時代は冬の月が愛好された⁽⁴⁾」ともいわれ、時代によって美意識の変化が見られるということもあるが、月を歌った琉歌三首について言えば、『琉歌百控』の作者から『古今琉歌集』の作者へ、そして明治四二年の琉歌作者へと、時代が下るに従って、月が新しい色合いを帯びて詠まれていったことが分かる。

*

*

琉歌は、先にあげた三首がそうであったように、美しい対象を「きよらさ」と歌い上げていた。

「きよらさ（清らさ）」は、「美しい。華やかに美しいさま。立派なさま。みごとなさま。」と『沖繩古語大辞典』⁽⁵⁾にある。「きよらさ」は、沖繩の美意識を考えていく上でこれ以上ない鍵語であるといえるわけで、「きよらさ」を用いて歌われた歌を拾い出していくことで、琉歌作者たちの美意識がどのように変化していったか見えてくるはずで

ある。

そのためのテキストとして、『琉球新報』明治三二年から四五年、『沖縄毎日新聞』明治四二年から四五年にかけて発表された新聞掲載作品⁽⁶⁾を使うことにするが、近代沖縄の琉歌作者たちが、どのような「美」を発見していったか探っていくためには、それ以前の琉歌を見ておく必要があるかと思う。そこでまず『琉歌百控』及び『古今琉歌集上巻』に収録された歌で、「きよらさ」の用例が見られる歌を順に取りあげていくことから始めたい。

まず、「きよらさ」を結句とする歌から見ていきたい。

『琉歌百控』には、次のような歌が収録されていた。

瓦屋森登て那覇港見れば恋し釣船のなたる清さ (二一〇)

二三月の夜雨時々よ違ぬ苗代田の稲や色の清さ (四四)

莆の若莆や笠張ての美さ竹の若竹やまく結美さ (四九)

恩納岳登て押下り見れば恩納宮童の手振清さ (九五)

八月の十五夜そなれやい見れば天久白浜の月の清さ (一四〇)

四方も□と豊なる御代や□茂て□の美さ (二二三)

世界や物音も啼鳥の声もすみて有明の月の美さ (二三七)

あかへさん走り突明い見れば庭の白菊の咲る清さ (二四三)

秋の夜の御月雲晴て今日や四方に照渡る影の清さ (三〇三)

夜嵐に空の浮雲も晴て澄渡て照そ月の美さ (三三三)

面て花咲ち鱸に虹引ち嘉例吉の御船の走か清さ (三八七)

百敷の庭に枝も葉も繁て翠差延る松の美さ（二三八九）

押風も今日や心あて更め雲晴て照そ月の美さ（四三四）

□五夜照る御月名に立ることに四方に澄渡る影の清さ（五八〇）

白菊の花の露の玉請て磨け照増る月の清さ（五九六）

『琉歌百控』六〇二首のなかで「きよらさ」を結句にしている用例は、以上の通り一五首だけである。そして、何を「きよらさ」と歌っているか見ていくと「釣船」「手振」「稲」「若葦・若竹」「月」「白菊」「御船」「松」といった九種だけになる。

「きよらさ」を結句にしない用例としては、

のかいそちめしやうる月も照清さ暁よともて鳥やなちよら（二二）

莆の若莆や笠張ての美さ竹の若竹やまく結美さ（九四）

流よる水に淪は立て花の色清さ抹て見ちやる（一〇〇）

伊集の木の花やあか清さ咲ひ予ん伊集成て真白咲な（二〇二）

木棉花作て木棉経懸て布清く織は弟が手巾（一八七）

詠てもあかぬ咲梅の美さ鶯に成て朝夕吸な（二四八）

月も照り清さ糸尋り童露の玉捨て貫ひ遊は（二七二）

月も照清さ花も匂しよらしや押風も涼しや出て遊は（三三八）

夏の夜の今宵押風も涼しや照る月も清さ出て遊ば（三六九）

道路の清さ世の中の盛り余多御万人も寄て慶喜（四〇二）

咲出たる花の色清さはれは匂写さ思て御側寄る（四一二）

押風に靡く庭の糸柳姿た色清さ見欲計り（四三五）

沙汰しゆら今宵照る月も清さ無蔵が俤の立よ増て（四七九）

稀に咲出たる紙内の花や見れば色清さ塩らし匂ひ（五八七）

名に立る今日は月影も清さ思童誘て詠欲舎の（五九二）

といったのがあり、そこには「花」「伊集」「布」「梅」「道路」「糸柳」といったものが「きよらさ」の対象として詠まれている。

次に、『古今琉歌集 上巻』に見られる「きよらさ」だが、同書は、春・夏・秋・冬・恋・仲風・雑の部立てからなり、一、七〇〇首の歌が収録されている。

春の部には、

昔から月や秋とてやりいゆすかはるやはなの上にてるかきよらさ（一六）

春のやまかわやはなのみつか、みいろふかくうつるかけのきよらさ（一二二）

みとりさしそへてはるかせになひくにはの青柳のいろのきよらさ（一二二）

嬉しさやめくてはつはるになれはみとりさしそえる松のきよらさ（二二八）

夜明けしら／＼とにはのましうちにつゆかめて咲るはなのきよらさ（八一）

打わらて咲るあさかおのはなにつゆのしらたまのか、きよらさ（八二）

にしきうちましりにはのましうちにつゆうけて咲る花のきよらさ（八三）
にはのましうちにつゆの玉うけてしほらし匂立るはなのきよらさ（八四）
みれはうれしさやにはのましうちに露ふくてはなの咲るきよらさ（八六）
あさことにみれはつゆうけてはなのうちわらひく咲るきよらさ（八七）
おみなしかやゆらいつよりもまさてはなの影うつすつきのきよらさ（九〇）
すみてなかれゆるはるのやまかわにちりうかふ花のいろのきよらさ（一〇三）

といった歌あり、「きよらさ」を結句にしないのでは「はつはるにむきてすさつはなみれははなも咲きよらさなり
もしきさ（四七）」がある。

夏の部には、

春すきて夏にたちかへてさきゆるでぐのくれなゐのはなのきよらさ（一〇九）
夏くれのすきてつゆのたまむすふ庭のなてしこのはなのきよらさ（一一〇）
わかなつかなれは野辺のもくさの押かせになひくいゝろのきよらさ（一二九）
たちよやひみれは穂はな咲そろておすかせになひくいゝねのきよらさ（一四五）
みれはうれしさやこなし田の稲のまたまよりまさて粒のきよらさ（一四六）
見れはうれしさや世かほよの稲のうちなひちく／＼なひちきよらさ（一四七）

といった歌があり、

秋の部には

名にたちゆる今宵くもりないんあれはみつもたま鏡かけのきよらさ（一四九）

押かせもけふやこゝろあてさらめ雲はれてゝらすつきのきよらさ（一五〇）

空はれて今宵ありあけのつきもすめてゝりまさるかけのきよらさ（一五一）

てるつきのかけにいろやますかゝみかゝれて咲る菊のきよらさ（一五五）

あかひさんはしりつきやけやいみれにはの白きくの咲るきよらさ（一五六）

あきやいろくゝのきくのはなさかりにしきうちましり咲るきよらさ（一五九）

思なしかやゆらけふのつきしらやいつよりもまさてかけのきよらさ（一六三）

うれしこと菊のはなにやとかゆるつゆの玉みかくつきのきよらさ（一八一）

秋ことにみれはにはのませ内につゆうけてさきやる菊のきよらさ（一八二）

秋のもゝくさの葉紅しゆる中にうちわらて菊のさきやるきよらさ（一八三）

秋のもみち葉のいろよりもまさてうれしこと菊のさきやるきよらさ（一八四）

ありあけのそらや雲霧もはれてすみて照るつきのかけのきよらさ（一八八）

この秋や君かうれしことさくのいつよりもまさてさきやるきよらさ（一八九）

夜明けしらぐとつゆのたまかみてにはの朝顔のさきやるきよらさ（一九六）

誰す織なちやかかもみち葉のにしき春のはなよりもいろのきよらさ（二〇二）

名にたちゆるけふや雲霧もはれて照りわたるつきのかけのきよらさ（二〇九）

さやかてりわたるつきにみかゝれて薄葉にかゝるつゆのきよらさ（二二三）

めくてあきくれはおすかせとつれて飛わたる雁のなたるきよらさ（二二三）
あきのもみち葉の二色よりまさていろ／＼の菊のさきやるきよらさ（二二七）

といった歌がある。「きよらさ」を結句にしてない歌としては「いそくみちよとて見るほともきよらさ内兼久山のはきのもみち（一五四）」「月もてりきよらさいとかまひれ童へつゆのたまひろてぬちやいあそは（一七一）」「名にたちゆるけふや月かけも清さおみ里よさそてなかみふしやの（一七三）」「くもきりもないらぬてりきよらさあすか所島の月やつらさはかり（二〇〇）」といったのが見られる。

冬の部には

はるの初はなもあきの夜のつきも忘てなかめゆるゆきのきよらさ（二三一）
向てきゆる年やよかほてやりいちゆて笑てなかめゆる雪のきよらさ（二三二）
いろ／＼の木くさふゆかれになても千代のいろふくむまつの美さ（二六〇）
雨はれてみれはさやかてるつきのしもの上にうつるかけのきよらさ（二七六）

といった歌があり、「きよらさ」を結句にしてない歌には「咲き残るきくのいろきよらさあものいまふち御目かけれわ玉こがね（二六八）」がある。

恋の部には、結句を「きよらさ」と結んだ歌はなく、

てりきよらさあてもさき、よらさあてもたるとなかめゆか月も花も（五八八）

の一首が見られるだけである。

仲風の部には「きよらさ」を用いた歌はない。

雑の部には、

幾年よへてもいろよまさりとてにはの松竹のもたへ美さ（一一〇七）

この秋や君かうれしこときくのいつよりもまさてきやるきよらさ（一二二二）

瓦屋つちのほて那覇みなとみれはこひしつり舟のなたるきよらさ（一二四五）

百筋のはんたおさねしちみれは西の松かねかてふりきよらさ（一一八四）

打ならそたけのふし／＼もそろてはたち宮童の遊びきよらさ（一二〇二）

おもてはなさかちともにすちひかちかれよしの御船のはるか清さ（一二三四）

嘉例吉の御船の渡中おし出れはなみもおしそひてはるかきよらさ（一二五六）

按司そひか御船の渡中おしちれは波はおしそひてはるかきよらさ（一二九五）

恩納岳のほておしくたりみれは恩納松金か手振りよらさ（一三九六）

なかくてもあかぬ白菊のはなのつゆのいろそひて咲やるきよらさ（一四三六）

波風もたゝぬてるつきのかけにうかぶ釣舟のなたるきよらさ（一四九四）

といった歌がある。「きよらさ」を結句としてない歌には

月もてりきよらさ花も匂しふらしや押風もすたしや出てあそは（一二〇七）

御旅しも美さみやたりしも清さいきやる親かなしすたしめしやうち（一二三三二）

よもつらのきよらさとく頼てをるな縁と肌そゆる浮世しらね（一二三七二）

あの伊集のはなやあん美さ咲ゆい我身も伊集のこと真白さかな（一二三七二）

芋の葉の露や真玉よかきよらさ赤糸あくまきにぬきやいはきやい（一二三七七）

伊集の木のはなやあん美さ咲ゆい我身も伊集のことましらさかな（一二四〇二）

ことしも作りやあん美さよかて蔵につんあまちまつんしやへら（一二四〇八）

蘭よりもかばしや錦よりきよらさたとるかないらぬ義理のまこと（一二五三〇）

といったのが見られる。

『古今琉歌集 上巻』に収録されている歌で「きよらさ」を結句にして詠まれたものといえば「はな」「青柳」「すさつ花」「あさかお」「つき」「でぐ」「なでしこ」「百草」「いね」「菊」「もみち葉」「薄葉」「雁」「雪」「まつ」「松竹」「つり船」「あそひ」「御船」「手振り」といったもので、結句以外で「きよらさ」の見られる歌では「月」「よもつら」「露」「伊集」といったものがある。一三三三の「美さ」「清さ」は、「立派な」という意味で、「美しい」の意はないといっているだろう。

『古今琉歌集 上巻』に収められた四季の部の歌数は二八〇首、恋の部の歌数が四七二首、仲風の部の歌数は一二七首、雑の部の歌数が八二一首というふうになっている。四季歌は、自然の景色を対象にした歌、恋や仲風は人事を歌った歌、そして雑には、自然景物を歌った歌が多く集められているのだが、自然を歌った歌に「きよらさ」を結句にした歌が多く見られることが分かる。

琉歌人たちはそのように、自然の景物の中により多くの「美」を見出しているが、『琉歌百控』に較べ『古今琉歌集 上巻』は、「きよらさ」の対象が圧倒的に増えていることがわかる。

あらためて整理しておくと、『琉歌百控』収録歌で、「きよらさ」を結句にしたものでは、

「釣船」「手振」「月」「白菊」「御船」「松」

結句以外で「きよらさ」とされたのでは、

「若莆」「花」「伊集」

といったのがあった。

それが、『古今琉歌集 上巻』になると、

「はな」「青柳」「すさつ花」「あさかお」「つき」「でぐ」「なでしこ」「百草」「いね」「菊」「もみち葉」「薄葉」
「雁」「雪」「まつ」「松竹」「つり船」「あそひ」「御船」「手振り」

と倍増し、結句以外で「きよらさ」が見られるのでは、

「月」「よもつら」「露」「伊集」

といったのがあった。

『古今琉歌集 上巻』は、「古今」の琉歌を集めて一冊にしたもので、そこには『琉歌百控』に見られる歌も収録されているが、『古今琉歌集 上巻』になって現れてきたものには、

「青柳」「すさつ花」「あさかお」「でぐ」「なでしこ」「百草」「いね」「もみち葉」「薄葉」「雁」「雪」「松竹」「あそひ」「よもつら」「露」

といったのがあった。

言ってみれば、それらは『古今琉歌集 上巻』に登場する琉歌人たちによって見出された『美』であったといえるものである。

*

*

明治期の新聞に掲載された琉歌で結句を「きよらさ」で結んだ歌を次に見ていきたい。

その前に、新聞に掲載された琉歌について簡単に紹介しておきたい。新聞は、琉歌の掲載を結社ごとに行っているが、明治期に見られる琉歌結社には、花月吟社（『琉球新報』明治三十三年十一月一日～明治三十六年一〇月三日、掲載数七九回）、心声社（『琉球新報』明治三十四年二月二十九日～三十五年三月二十五日、掲載数二回）、清音社（『琉球新報』明治三十五年一〇月一日～三十九年、四六回）、日曜会（『琉球新報』三十九年六月一日～四十五年七月一日、二〇七回）、沖繩毎日新聞（明治四十二年三月一〇日～明治四十五年七月二日、六八回）、吟友会（『琉球新報』明治三十九年六月九日～七月二四日、三回）、名護琉歌会（『琉球新報』明治四〇年六月～四三年四月、四六回）、『沖繩毎日新聞』明

治四三年四月～四四年九月、四回）、奥武山歌会（『琉球新報』明治四〇年から四五五年、一四四回、『沖縄毎日新聞』六五回）、比謝缸友竹会（『琉球新報』明治四〇年十二月～明治四三年一月、九二回、『沖縄毎日新聞』明治四二年六月～四四年四月、九〇回）、二六琉歌会（『琉球新報』明治四一年四月～四三年一月、三八回）、西林琉歌会（『琉球新報』明治四一年五月～四四年二月、一一九回、『沖縄毎日新聞』明治四四年六月、六回）、糸満琉歌会（『琉球新報』明治四一年一月～四五年七月、一二二回、『沖縄毎日新聞』明治四二年五月～四五年七月、八九回）、戊申琉歌会（『琉球新報』明治四二年から四五五年、六五回、『沖縄毎日新聞』明治四二年～四五五年、五二回）、その他黄胡蝶社、三〇字詩会、アワイ会、東京琉歌会、尚友会、後道琉歌会、今帰仁琉歌会、方言狂歌会、西蔵琉歌会、垣花琉歌会、燕居会といった二三の琉歌会がある。

琉歌会は、新派の琉歌会を除くと、兼題・当座があつて、歌人たちは、それに基づいて歌を詠んでいた。兼題は「〔兼日題の略〕歌会・句会などを催すとき、あらかじめ出しておく題。また、その題で詠んでおく歌・句、兼題。」（『広辞苑』）のこと、当座は「その席上で出す和歌・俳句の題。また、そのようにして即興で詠む和歌・俳句。即詠、即吟」のことで、兼題は、いわゆる「題詠」と見て差し支えないだろう。

「題詠」は『古今集』のころからちらほら見られ、「確立するのは院政期、『堀川百首』の時代」で、「和歌を学ぶ人は、『堀川百首』の題を詠むことを修練の一つとした」といわれている。「題にはさまざまな種類」があつて「鷹狩り」「花」のように、一つの素材で構成されている素題もあれば、「水郷春望」「尋花」のように、二つ以上の素材を結合させた複合題³（谷知子、前掲書）もあるというが、琉歌結社の兼題は、まさにそのかたちに習ったに違いないものである。

明治の新聞に掲載された琉歌で、結句を「きよらさ」にして詠まれた歌の「兼題」を見ていくと二七〇余種にのぼる。『琉歌百控』『古今琉歌集 上巻』で「きよらさ」と歌い上げられてなかった景物を、「兼題」で見えていくと、女

郎花、鶏冠木、藤、硯、卯の花、毛作、萩、鶴、若草、虹、九年母、滝、雲、三日月、梅、蚕、山梨、躑躅、桃、海、川、螢、蓮、春雨、波、星、磯波、山吹、あられといったのが出てくる。

明治三二年以降になると、そのようにさらに数多くの風物に「美」を見出していったことがわかるが、それは、必ずしも、実際の風物を見て詠まれたものであったとは言えない。当座はともかく兼題・題詠ということになると「現実の体験に基づいてではなく、与えられた題によって歌」が詠まれていたからである。

その典型的な例を、明治四〇年二月二七日付『琉球新報』に掲載された名護琉歌会の兼題「初雪」に見ることができる。

夜明け白ら白らと戸はあけて見れは庭に初雪の積る清さ

雨かたらともて打向て見れは庭に初雪のふるか清さ

(一三四二、高宮城朝修)

(一三四三、比嘉賀功)

『球陽』には、一七七四年から一八五七年までの間に六回、雪が降ったという記録があり、「沖縄でも十八世紀後半から十九世紀中頃にかけて氣候が著しく寒冷化した時期には、史料や琉歌にみる正真の雪が観測されたことは事実であろう」と言われているが、明治の末頃に降ったという記録はないので、多分「初雪」を兼題にした歌は、「与えられた題によって」詠まれたものであったのではないかと思われる。

宮坂静生は『季語の誕生』⁽¹⁾の中で、大伴家持の歌「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」を上げ「雪はよき御代への称美であり、かつ稔りの秋を予祝する瑞兆として称えられている。雪が単に季節の景物ではなく、よきことを称える象徴であったり、予め称えることで、稔りを確実なものにする兆しと考えられたりすることは、そこに、古くからの長い間の伝承が記憶されている証ではないか」と述べ、そのあとで、藤原顕季が、「雪見舞い」と

して源俊賴と藤原顯仲あきふなに送った歌と、二人の返歌をあげ、大伴家持ら万葉歌人が「共通に感じ、信じていた雪の靈力への信仰心は」彼らには見られなくなり、平安後期になると「雪は社交の場を盛り上げるコミュニケーションの道具に近いことばになりながら、かすかに「言霊」の残照をとどめるものになっている」といい、そして「雪が冬の季題として決められていく。それは冬と季節を限定されることで安定したイメージを獲得すると同時に、失うものも多いことを思わせる」と述べていた。

「初雪」二首は、実景を詠んだものではないだろう。兼題として出されたものを詠んだというだけではないだろうか。「季語」に心を砕いたに違いないもので、もはやそこには、「古くからの長い間の伝承が記憶されている証」などなにもないといえる。

雪は、「予祝」のためなどでなく、出来合いの美意識を発揮するためにだけ持ち出されたものであったといつていい。

雪はするように、冬の「季語」として兼題になり、雪を見ることのない沖縄でも、想像でもって歌われたといえるだろうが、兼題の多くは、実見したところのあるものが取りあげられていたはずである。

*

*

兼題でたびたび取りあげられたものに「月」がある。ざっと上げていくと「月前芒」「冬の月」「月前菰」「名所月」「月前菊」「夏月浮水」「月下泉」「寄月祝」「月前落葉」「冬月」「夏月」「雨後夏月」「月入簾」「草露映月」「三日月」「月照菊花」「名所春月」「海辺夏月」「楼上見月」「庭前寒月」「夏月似秋」「月下紅葉」「月照瀧水」「恋月」「山家月」「海辺夜月」「月下旅行」「寒月照梅花」「都月」「春月照花」「今宵」といったのがある。

これらの「兼題」が語っているのは他でもなく、「月」の美しさが様々に歌われているということである。

虎頭松山に雲の御衣かけてとよむ月しらの影の清さ

夏くもも晴れてさやかてる月の湖にうつる影の清さ

散り落てて庭につもる紅葉はに曇りないぬ月のてるか清さ

さやか照り渡る秋の夜の御月真簾に漏れる影の清さ

月や草の葉の露の玉ことに色わけもないらんうつる美さ

いつもなかみゆる月や月やすか楼上の月やかはて清さ

夏もよそなすさ走川の水に木間洩れうつる月の美さ

木枯の風の雲や吹はらて雪の上に照ゆる月の美さ

(名所月、八九〇、諸見里朝奇)

(夏月浮水、一六三七、鉢嶺清懷)

(月前落葉、二〇四四、泉川寛秀)

(月入簾、二八三九、嘉数朝睦)

(草露映月、二八六五、護得久朝常)

(楼上見月、四一一二、南島)

(夏月、四五七二、鶴歩)

(冬月、八二八五、稻嶺盛治)

数多く見られる月を歌った歌から、僅かの用例を引いてみたが、ここには、明治琉歌が、『琉歌百控』『古今琉歌集上巻』に、何を新しく付け加えたかが鮮明にあらわれているはずである。

それは「月の清さ」を言い表すのに、『琉歌百控』『古今琉歌集 上巻』の両者には見られなかったものが取り出されてきているといったこともあるが、あと一つ大切なものが見られる。

『琉歌百控』は、月の美しさを言い表すのに、「月」そのものに焦点を絞るとともに、あと一つ「影」を取りだしていた。それが『古今琉歌集 上巻』になると「かけ」が主となり、「つき」そのものは後退し、「てる」が躍動してくる。そして明治琉歌になるとこれまで見られなかった「うつる」が登場してくる。

それをさらに分かりやすくいえば、「影の清さ」を共通基盤にして、「月の清さ」から「てるか清さ」へ、そして「うつる美さ」へと変化していったということである。それは、いうまでもなく、月の観賞のしかたが変化していったということを示すものでもあるが、明治三〇年代以降の琉歌歌人たちは、「うつる」というかたちで、月に新しい

美を見出したのである。新しい美意識の登場という由縁である。

*

*

「きよらさ」と歌われた歌をめぐって、明治琉歌は、数多くの「美」を浮上させたこと、そして月を用例にして、「うつる清さ」といった新しい「美」が見出されていたことについてみてきたが、「美」をあらわす「きよらさ」をとりあげて考察したのに二人の先人がいる。

一人は渡久地政宰。

渡久地は「琉球美の探求」⁽²⁾の章で「きよらさ」を取りあげ、「琉球語では」「きよらさ」が「美麗」の世界を示現する代表語となっている」といい、『琉歌全集』に収録されている三〇〇〇首の中で「きよらさ」系の使用例が「二三九例」に上ることをあげ、「きよらさ」が、いかに琉歌の美的形象語の中心であるか首肯できる」としたあとで、「きよらさ」の美的対象、すなわち琉球の歌人たちが、いかなるものに「きよらさ」を感得したか調べてみると」として、その用例を分類していた。

渡久地の分類によると、「1、月光にたいするもの 三八例、2、花にたいするもの、三〇例、3、容色のきよらさ 八例、4、土木関係 六例、5、舟のきよらさ 六例、6、草木のきよらさ 一九例、7、手踊りのきよらさ 七例、8、諸現象に関するもの 八例、9、作物関係 三例、10、工作のきよらさ 二例、11、疱瘡を恐れる敬遠美化 四例、12、抽象的な非具象物関係 八例」といったようになり、「きよらさ」の美的対象は月・花・容色・舞踊・土木・舟・天然現象・植物・工作器物等、ほとんど視覚的な単一美の世界である」と述べていた。そして「きよらさ」は視覚を通して受け入れた美意識であった」としていた。

渡久地は「きよらさ」の「まとめ」として、「琉球におけるきよらさ美の完成は官撰『おもろさうし』であることも忘れてはならない。ここで完成せられた美意識は、琉歌に流れ込んできている」といい、「語彙的な活力からすれ

ば、琉歌時代は、おもろ時代よりも、この語は萎縮しているかの印象を受けるのであるが、琉球美の唯一の中心語である点においては変りない」としていた。

あとの一人は嘉味田宗栄である。

嘉味田は、「くも霧も晴れてつきやすみよしの浮世名に立ちゆるあきの今宵」「てる月のかげにいろやます鏡みがかれて咲きゆる菊のきよらさ」といった『古今琉歌集』に見られる修辭法の一つである「かけことば」について触れ、「既成の歌の枠に、ことばの無反省ないかえや組みあわせをするだけに終わっている」と断じたあと、「この類型化は美的理念をあらわすことばにもあらわれている。まず語法における体言を文末にもつてくるといった修辭法の続出はともかくとして、「きよらさ」「しほらしや」の類出もどうにかならないものかと思われる」として、「きよらしや」「しほらしや」を結句にした歌を上げ、「視覚からとらえる美をきよらさ、嗅覚・聴覚で感じるのをしほらしやと言いつけているのは注目すべきであるが、雑・恋の歌と異なり、大宮人たちの手すさびになる四季のうたでは、このような類型的表現が目立つのである。日本文学における花鳥風月の表面的な影響といえる」と述べていた。⁽¹³⁾

渡久地、嘉味田ともに琉歌に見られる「きよらさ」を使用した歌が、「萎縮しているかの印象を受ける」こと、「日本文学における花鳥風月の表面的な影響」によって歌われているとして、高い評価を与えていないが、「きよらさ」が、「美的理念をあらわすことば」であるという点では一致していた。

「きよらさ」が、「美的形象語の中心である」こと、「美的理念をあらわすことば」であるといった指摘とともに、「きよらさ」を用いた歌が類型的・表面的であるといった批判は、決して見当違いではない。しかし、そのなかで新しいかたちの「美」を見出していった歌人たちがいたのである。

類型化や形骸化を指摘することは大切なことだが、そこには、類型の中で、僅かながらとはいえ新しい美を見出すとした詠者たちがいたことを見落としてはいけないであろう。

【註】

- (1) 『和歌文学の基礎知識』角川選書 平成十八年五月三十一日
- (2) 『季語の誕生』岩波新書 二〇〇九年十月二十日
- (3) 『花のものの言うー四季の歌ー』新潮選書 昭和五十九年四月二十五日
- (4) 谷 知子、前掲書
- (5) 『沖繩古語大辞典』編集委員会編 角川書店 平成七年七月十日
- (6) 仲程昌徳 前城淳子『近代琉歌の基礎的研究』勉誠出版 平成一一年一月二十五日
- (7) 「清さ」は、立派な、の意。
- (8)、(9) 谷 知子、前掲書
- (10) 伊志嶺安進『沖繩氣象歳時記』ひるぎ社、一九八七年三月一五日
- (11) 岩波書店、二〇〇九年一〇月二〇日
- (12) 『日本文学から見た 琉歌概論』（武蔵野書院、昭和四七年九月二〇日
- (13) 『琉球文学序説』沖繩教育図書 一九六六年七月一五日

補注

引用した琉歌に添えた作者名、番号等は『南島歌謡大成Ⅱ 沖繩篇下』所収の「琉歌百控」「古今琉歌集」、明治琉歌に關しては『近代琉歌の基礎的研究』によった。